

# 管子「九敗」私解

重 澤 俊 郎

管子の立政篇は、三本・四固・五事・首憲・首事・省官・服制・九敗・七觀の九項を設けて政治上の基本問題を論じたものである。このうち九敗の一項に對しては特に「立政九敗解」と題する別の一篇が有つて、其の内容を敷衍解釋している所から考へて、立政篇のうちでも其の成立が最も早く且つ重要な意味を認められてきたことが推測される。管子の書に於いて「解」を有する五篇のうち、四篇までが基本的政治論で經言に屬し、他の一篇は區言に屬すとは言へ管子の法思想の根幹を爲すもの、一を爲し、要するに總て管子に在つて重要な地位を占める論著に外ならないからである。五篇の解が何れの時代に何人に依つて作られたかは固より知り得ないが、こゝに取り上げる九敗解は、立政九敗篇の有する思想上の意義を、少くとも若干の重大な點に於いて甚しく見逃していると言わざるを得ない。獨り解のみならず、後世管子の書を解する者、尹知章・劉績の注を始めとし、近くは戴氏の「校正」や安井氏の「纂詁」などに至るまで、文字の表面的釋義に於いてはいよく精密を加えるに拘らず、思想上の意味内容に就いては一様に殆んど論及していない。かくの如き解釋に止るならば、九敗が何故に九敗として管子の指彈する所と爲らなければならぬかを理解することは、極めて困難と言わざるを得ないのである。

\*

\*

\*

\*

さて立政篇の九敗とは、管子が理想とする政治の確立に對して、妨害または破壊的結果を來す思想、並びに社會生活上の立場九類を擧げ、其の齎す所の政治的社會的弊害を指摘したものである。行論の順序として、其の要點を左に示そう。

- (一) 寢兵之説 險阻不守
- (二) 兼愛之説 士卒不戰
- (三) 全生之説 廉恥不立
- (四) 私議自貴之説 上令不行
- (五) 群徒比周之説 賢不肖不分
- (六) 金玉貨材之説 爵服下流
- (七) 觀樂玩好之説 姦民在上位
- (八) 請謁任舉之説 繩墨不正
- (九) 諂諛飾過之説 巧佞者用

以上上段が九敗の諸説であり、下段は其の説が優勢と爲つた時豫想される所の社會的害毒である。九者のうち、群徒比周之説以下の五者は必ずしも體系的な思想として取り扱ふに足るものではない。即ち、群徒比周して朋黨が發生すれば蔽美揚惡が行われるから、賢不肖が分たれざるに至る。君主が自己の私生活に關して金玉貨財を尊ぶに至れば、必ず官位爵祿を以て取り引きする傾向を生ずるが故に、爵服下流の現象を將來する。觀樂玩好は要するに君主の物質的快樂に外ならないから、其の提供者は顯要の地位を極めて容易に獲得する。尹注に「費仲は奇異を奉ずるを以て顯位に居り、董賢は柔曼を以て朝謁に處る」と解する所以である。請謁任舉が盛んと爲れば國の法度が立たなくなるのは言を俟たず、諂諛飾過の言によつて君主が自己反省に怠るならば、巧者佞人が勢力を占めるようになるのは當然である。かくの如く、九敗の後

半五者は政治上の眞理には相異無いとしても、説それ自體は上述の内容が示す如く、單なる社會生活上の立場に過ぎず、思想というほどのものでないのみならず、解及び尹注の説明が決して當を失していないから、今は問題の外におく。

然し、寢兵之説より私議自貴之説に至る四者は頗る趣きを異にし、すべて體系的思想として豊富な内容を具え、思想上重要な意義を有するものと考えられる。所が此の四者に對しては、解を始め後世諸家の解釋が、程度の差こそ有れ悉く核心を逸している憾みがある。いま寢兵之説に對する解の全文を參考までに示すならば、次の如くである。

人君唯母聽寢兵、則群臣賓客莫敢言兵、然則內之不知國之治亂、外之不知諸侯之強弱、如是則城郭毀壞莫之築補、甲弊兵彫莫之修繕、如是則守圉之備毀矣、遼遠之地謀邊竟之士修、百姓無圍敵之心、故曰、寢兵之說勝、則險阻不守、

全生之説に就いては、君主が若し全生の説に耳を傾けることが有れば、群臣は物質的の生活の手段としての滋味聲色を追求するが故に道義は頽廢し、君主の地位も亦正しく保ち得ざるに至る、という意味を述べている。兼愛之説と私議自貴之説とに對する解は比較的眞を得たものと言い得るのであるが、以上の二例に於いて明かに看取される如く、總じて表面的現象について論ずるに止り、思想の本質に對しては殆んど全く目を蔽うていと稱するも過言でない態度である。私の見る所を以てすれば、此等四種思想は、あくまで其の抱懷する世界觀、延いては社會上の理想に問題が存する。此等の説が優勢となれば、いかにも解その他の解釋に指摘されるような現象が発生することは事實であるが、しかし管子の著者が主たる問題として意識する所は決してかゝる隨伴的現象ではなく、必ずそれぞれの思想を支えている根本原理に在る。つまり寢兵以下の四の思想は、その本質上管子の書に説かれる社會上の理想と矛盾する主張を含み、自己にとつて甚しき脅威となるの故を以てこそ、大いに問題とさるべき理由が有るのである。

さて、こゝに寢兵之説と言うのは、戰國の時宋鉞に依つて代表された思想である。宋鉞の思想は先秦の諸書に散見する

が、例えば莊子天下篇には尹文と並べて、其の主張が

見侮不辱、救民之鬪、禁攻寢兵、救世之戰、

に在つたことを傳え、また「以禁攻寢兵爲外、以情欲寡淺爲内」とも記している。之に依れば、禁攻寢兵による平和主義は彼の思想を支える一要件であつたことを知り得る。秦楚の構兵に際し、彼（孟子には宋輕に作る）が利不利の論を以て停戦勸告を試みたのも、其の現れに外ならない。孟子は、宋鉞が利不利の論を主と爲し、仁義の立場から停戦を説かない點を把えて詰難を加えているが、彼の寢兵説は決して單なる戰爭に伴う表面的利害から導き出されたものではなく、深く彼獨自の世界觀に根底を置いている。それは、彼が自ら「見侮不辱」と言い、彼の思想が「別宥」を以て呼ばれる事實によつて立證される。

莊子天下篇の作者は、宋鉞尹文を論ずるに當り、先ず

不累於俗、不飾於物、不苟於人、不伎於衆、願天下之安寧以活民命、人我之養畢足而止、

と述べる。俗情の累する所と爲らず、外邊を矯飾せず、他人と爭論せず、世人に逆わずというのは、すべて自己を主張するに極めて消極的である點に於いて共通性を有する。荀子に子宋子の語として、「侮らるゝの辱ならざるを明かにし、人をして鬪わざらしむ」と記し、韓非子に「宋榮子の議、囹圄を羞じず、侮らるゝも辱とせず」と言うのは、正に此の消極主義の一面を論じたものに外ならない。此の自己主張に於ける消極主義が存する以上、「鬪争せず、隨いて仇とせざる」禁攻寢兵の説が成立する所以は、もはや説明を要せざることゝ爲つたが、其れが天下の安寧を願ひ民命を活そうとする目的を以て説かれたとすれば、宋鉞の消極主義は其の抱懐する新しい社會理想の根本原理であつたことが理解される。

しかし、「見侮不辱」によつて表現される彼の消極主義は、決して一方的な自己否定主義でもなく、また妥協的な隱忍主義でもない。侮にせよ辱にせよ、價值意識を離れては存し得ない。狎侮を受けて恥辱を感じるのは、是非善惡に對する

價值判斷を伴つて初めて可能なことに屬する。故に見侮不辱が主張される爲めには、價值の問題が先ず前提として考えられていた筈である。價值觀に關して宋鉞と正反對の立場を取つた荀子の論難<sup>⑧</sup>が、主として此の點に向けられたのは正に其れを物語るものであるが、荀子の駁論の内容からも推知される如く、人爲的評價の不成立を信ずるのが宋鉞であつた。人間の判斷に本く是非善惡の根據が一たび失われるに至れば、見侮不辱は論理上の歸結として成立が保證される。價值感情の成立すべき基盤が既に存在しない以上、侮の意識も辱の意識も俱に有り得ないからである。かくの如き價值觀は窮極的には、人間の認識能力に對する不信に由來し、従つて一種の懷疑論的立場を取るようになるが、宋鉞の消極主義が此のよくな哲學的根底を有するとすれば、茲に一部の道家思想との親近性<sup>⑨</sup>が肯定されるのみならず、所謂「禁攻寢兵」が決して一時的刺戟によつて發生した平和論の類に止るものでなく、また其れ故にこそ、人爲的價值を追求し富國強兵主義を説く思想と鋭く對立する所以が理解される。

\*

\*

\*

\*

宋鉞が人間の認識能力の限界を知り不信意識を抱いたことは、彼の世界觀を性格附ける決定的要素であつた。こうした懷疑的立場に於いては、主觀への信賴が成立する餘地は無く、主觀の權威に倚存するものは一切不確實なもの、相對的なものに過ぎないとして、否定されなければならない。宋鉞に於いて價值の問題が新たに取り上げられたのも、全く此の爲めに外ならなかつたのであるが、ここに所謂「別宥」思想の形成される契機が存するのである。

別宥が宋鉞に依つて説かれたことは、莊子天下篇に

接萬物、以別宥爲始、

と有るを以て明かである。別宥は一に去宥とも言われ、呂氏春秋に、

夫人有所宥者、固以晝爲昏、以白爲黑、以堯爲桀、宥之爲敗亦大矣、亡國之主、其皆甚有所宥邪、故凡人必別宥然後

知、別宥則能全其天矣、

と記される所のものである。また尸子廣澤篇には

料子貴別囿、

の文が見え、囿字に作られている所から考えれば、別宥は總て事物への拘執から脱却すべしとする主張を根幹とする思想に外ならないことが確認され、また呂氏春秋に於いて上記の文の前に記録されている二つの説話は、何れも事物に拘われることの不合理性を示そうとする目的を有するものである。従つて、別宥を同義二語の並列と見て事物を辨別明白にする意味に取らうとする解釋は、成立し難いと思われる。

別宥の本質が既にかくの如しとするならば、其れが主觀の權威への不信を齎し、遂には自己を自己として限定し成立させる一般的根據に對する懷疑の思想にまで展開することは、敢て異しむに足りない。自己の主張、自己の主體性の意識は正しく「囿」であり、別宥は其の否定に外ならないからである。呂氏春秋の説話に見える齊人は、黄金に拘われた爲めに、他人の居ることも法律の有ることも一切忘れて金塊を強奪するに至つたが、自己意識に拘われることの反社會性も全く此と異なる。宋鉞に於いては、人間は自己を主張すべき根據を如何なる意味に於いても有しないのである。莊子に言われる「不伎於衆、不苟於人」は、實は此の自己放棄の結果始めて可能な事であり、また韓非子顯學篇に、漆雕の「廉」に對して宋榮の「恕」が、漆雕の「暴」に對して宋榮の「寬」が特徴として指摘されているのは、恕及び寬が廉及び暴に比して、自己意識のより淺少な状態に外ならないからである。

事物に拘執しない態度、特に自己主張の根據に疑いを懷く別宥の思想は、性格として、當然特殊を棄てて普遍に就き差別を排して平等を尊ぶ方向を取る。荀子非十二子篇に宋鉞墨翟の主張を並記し、それを

不知壹天下、建國家之權稱、上功用、大儉約而慢差等、曾不足以容辨異縣君臣、

と論評しているのは、正に此の點を衝いたものである。墨翟の思想は、兼愛に關して「慢差等」の現象を一應呈するに拘らず、國家社會の構成に於いては、上下の區別君臣の懸隔を容れざるが如きは到底許さるべくもなく、賢人を頂點とする強權によつて統制された國家を以て理想とするものである。従つて上記荀子の論評の首尾の部分は、主として宋鉞を對象とするものと見なければならぬ。いかにも別宥思想の立場よりすれば、等差階級の別を設け君臣の敍列を嚴明にするが如きは基本的に許容される筈が無く、天下を統一し國家權力を樹立するに至つては全く悖理と稱するの外は無い。荀子の如き禮法主義者から、「天下を壹にして國家の權稱を建つるを知らず」と評せられる充分の理由を具えている。これは別宥思想の論理的展開として當然豫想せらるべき社會的理想に外ならないが、此に至つて此の思想が管子の基本的思想と本質的に相容れない所以が、いよいよ明かとなるのである。武力主義は言うまでも無く、階級社會も權力國家も總て自己に「囿」するの故を以て根本的に否定されなければならぬとすると、其れが富國強兵策による世界の權力支配を政治上の窮極目的とする管子に依つて肯定される道理が無い。「九敗解」などに言うような、平和主義の提唱が國民や軍隊の國家意識を沮喪せしめるといふ、單純な理由からでは決してなく、兩者は思想の根底に於いて矛盾する哲學を有するが故に、相互に否定的に對立し、一は他に取つて其の存在を論理的に許さざらんとする脅威に外ならないからである。

漢書藝文志小説家に「宋子十八篇」が著録され、班固の自注に依つて其れが宋鉞の著述であることを知る。漢志の小説家は「街談巷語」の類と言われ、而して宋鉞は自己の主張を以て天下に遊説し、「雖天下不取、強聒而不舍」と莊子に記される所から考えれば、其の寢兵別宥論は共鳴者の多寡は別として、世間に鳴り響いていた點で小説家的様相を帯びていたことは想像に難くない。かうした社會的影響力も、勿論管子の關心の對象になつたとは思われるが、立政九敗篇に於ける問題の重心を此に移動させて考えることは誤りと言わざるを得ない。

寢兵之説と並んで指彈される四説のうち、次に取り上ぐべきは、「廉恥不立」の弊を指摘される所の全生之説であるが、此は楊朱の思想を指したものと考えられる。現行の列子に多く見える楊朱の説が、大部分後世の潤色を経たものに過ぎないことは周知の通りで、原始楊朱の思想として信じ得るものは、周末漢初の文獻に斷片を遺すに止る。例えば淮南子汜論訓に、

兼愛上賢右鬼非命、墨子之所立也、而楊子非之、全性保真、不以物累形、楊子之所立也、而孟子非之、の文が有り、原始楊朱の基本的輪廓を知らしめるに足りる。管子に言う全生は勿論此に言う全性の意味で、保真と同じく、人間天與の本性を純粹に保持して一切外物の繫累から完全に自由であることが、人間の眞の幸福を確保する所以と考えるのであるが、孟子に楊朱墨翟の道が共に排斥されながら、兩極端の思想として記述されている點から見れば、思想の本質が墨翟の兼愛・非命などの基本的主張と全く對蹠的であつたことは、先ず疑う餘地は無い。ここに楊朱の思想を規定する第二の輪廓が発見される。

ところで、兼愛は利他の心であり、非命は諦觀的消極的な運命論の否定による、積極的な勤勞努力主義の確立に外ならないが故に、之と對蹠的立場に在る全性保真説に於いては、利他意識の下に爲される一切の目的的行爲は是認される筈が無い。孟子が楊朱を論じて、

楊子取爲我、拔一毛、而利天下不爲也、

と言うのは、之に接續する所の

墨子兼愛、摩頂放踵、利天下爲之、

の文章と比較考察するならば、「一毛を抜くも天下を利すれば爲さず」と解するのが妥當と思われる。つまり利他を以て全性保真の敵と見る楊朱は、一毛を抜くが如き微微たる行爲と雖も、其れが利他意識を伴う限り總て否定せざれば已まないのである。列子楊朱篇に、楊朱の語として



伯成子高不以一毫利物、中人人不損一毫、人人不利天下、天下治矣、

と見えるのは、固より原始楊朱そのままの言ではないとしても、孟子の論ずる所と正に同じ思想を述べたもので、楊朱が如何に利他的意識の絶棄を強調したかを察するに足りるであろう。蓋し、人間が自己を精神的に消耗する最大の原因を反自然的行爲に歸し、人はすべて之に依つて其の本眞を歪曲毀損されると考えたのであるが、他を利し天下を利することが殊に問題とされなければならぬのは、其れが最も著しい反自然と考えられた結果に外ならない。蜀志劉巴傳の注に、

内無楊朱守靜之術、外無墨翟務時之風、

と有り、守靜を以て務時に對立せしめ、以て墨翟に對する楊朱の特徴を明かにしている。此によつて、他を利せざる楊朱の自然は靜を守ることによつて確立されること、即ち不利他は主觀的には守靜に外ならない所以を知り得るのであるが、これは彼に於ける不利他の思想が一時的世俗的な利己觀念の合理的形態としてではなく、守靜という困難な主觀的努力を経て始めて達成される、むしろ嚴格主義的要請として成立したと言つても可い性質のものであることを示すと考えられよう。而して此の思想の根底に、性を靜なるもの、情を動なるものとする人間論が存することは、容易に推論し得る所であるが、例えば呂氏春秋不二篇に、

墨翟貴廉、陽生貴己、

と言ふが如き、その明證と言つて差支えない。守靜が貴己即ち自己の人間としての本性を尊重する所以たり得るのは、人間の性を本來靜なるものと考えるからに外ならない。是に於いて楊朱が力を極めて排斥する「他」なるものが、單に普通の意味に於ける自己以外の他者を指すに止らず、靜なる性以外の自己も亦其の一部とされていることが看取される。人間に於ける非靜的なものは、彼に在つては一切靜と否定的に對立する要素として意識される。兼愛の如きは極端なる他者を對象として成立するが故に、當然最も強い非難に値する理由を有するが、自己内部の他者の存在をそのまま不問に附す

ることは論理上許さるべくもない。かかる他者を排除して自己を純正にする爲めにも、守靜は唯一の方法だったのである。かくて全生之説は其の獨自の人間哲學の故に、先ず自己自身の動的な欲望の克服が前提として要求されるから、決して世俗的な快樂主義とは類を同じくするものでなく、むしろ其れとは反對の極に於いてこそ成立する性質のものたると同時に、其の貴己の精神の極致に於いては、孟子の指摘するように、「無君」の主張を生ずるに至ることも極めて當然の歸結に外ならない。既に上に述べた如き人間解釋を取る限り、國家社會の成立は不可能の外は無いからであるが、此の思想が管子と相容れないことは改めて説明するまでも無いであろう。九敗篇に於いても呂氏春秋に於いても、全生之説は廉恥の敵と見られているが、君主中心的國家秩序は廉恥を自己存立の道德的支柱として強く要求するものである。管子の著者が牧民篇で、廉と恥とを禮及び義の二者と共に國の四維と稱して強調する所以は此に在る。九敗解に於いて、全生之説が滋味聲色の追求と結合して解され、若し君主が全生の説に傾聽するならば上下を擧げて官能的欲望を縦にし、男女の別は失われ、禽獸に墮落するが故に禮義廉恥が立たなくなる、と説明されているのは、此の思想の出發點を爲す人間觀を全く無視した甚しき誤解と言わなければならない。全生の説と快樂主義とが相互に反對の方向に於いてのみ存在し得ることは、實に兩者の世界觀の差異に由來するのであるが、この差異は同時に原始楊朱と魏晉的楊朱の差異とも正に一致するものである。

\*

\*

\*

\*

墨家の思想は、社會的矛盾の窮極的原因を、人人が自己を愛するが如く他人を愛せざることに求め、その故にこそ兼愛を以て基本的主張とするのであるから、此の思想の影響として戦争に對する批判的態度が強力に生ずるのは當然であり、「士卒不戰」の結果に至るのは説明を要しない。

第四の私議自貴之説に關する九敗解の所説は、此の思想の影響として、「上輕爵祿而賤有司」の風を生じ、其の結果「上令不行」に至ると言うのであるから、隱遁思想を以て私議自貴を解したものと察せられる。隱遁思想には、社會そのもの

を根本的全面的に否定するものと、一時的部分的に否定するものとの差異は有るが、<sup>⑦</sup> 権力秩序的な統制から離脱して自己の理想とする別個の世界を造り出す點は共通であり、等しく反國家的性格を包藏すると言わなければならぬ。彼等に於いては、尊ばれるべきは個人の主觀的判斷であつて、君主や權力階級によつて定められた公的な其れではない。原則として前者は後者に優先すべきである。私議自貴の説が隱遁思想との關聯に於いて解釋される妥當性は、正に此に在るのである。前記の如く隱遁思想に二つの類型を生じたのは、其の依る所の哲學的立場を異にする爲めで、例えば其の一は人間の認識能力に對する基本的懷疑に關係し、他の一は反對に寧ろ人間の能力に對する強い信頼に倚存する、というが如き差異の存することは否定できないとしても、國家權力が爵祿名譽などを手段として人民官僚を欲するままに操縦せんとする時、その對象と爲り得ないことだけは確かである。韓非が、社會的世俗的欲望を全く有せざる伯夷叔齊の徒は、君主の自由な使役に供し得る方法無きが故に國家的に無用である、と論じているのは此の意味に外ならない。而して飽くまで自己自身が絶對者である所の隱遁思想に於いて、政治に對する批判の自由が完全に留保されていることは言うまでもないから、管子の思想から見れば妨害者であると共に重大なる脅威に外ならなかつたのである。なお、これで私議自貴之説が單に大言放談を縱にするの謂でなくして、或る確乎たる世界觀に根本する思想であることが示唆されたばかりでなく、其れが主として道家、特に莊子並びにその同調者の思想を指していることも、言わずして明かになつたと思う。

以上述ぶる如く、寢兵以下私議自貴に至る四種の説は、それぞれ宋鉞・楊朱・墨翟・莊周を中心として展開した思想を主たる内容とするものである。此の四者はすべて先秦に於いて顯學と稱するに足る勢力を有し、内容的にも各々獨自の世界觀を以て體系附けられたものである。そして其の世界觀が管子と基本的に相容れない所以は既に見た如くであり、四者は此の故を以て九敗に數えられるに至つたものに外ならない。政治思想上の不同も管子に取つては決して輕小な問題ではなかつた筈であるが、其の背後に在つて其れを支えている哲學的立場の矛盾こそは、より本質的意味に於いて問題とされ

る理由が有つたのである。

註

- (1) 孟子告子篇下。趙岐注に宋徑を宋人となす。鉞徑榮の三字は普通の故に、莊子や韓非子には宋榮子とも稱する。
- (2) 苟は苟且の意でなく、苟察の意に解する章炳麟の説が妥當と思われる。
- (3) ……雖以見侮爲辱也、不惡則不鬪、雖知見侮不辱、惡之則必鬪、然則鬪與不鬪邪、亡於辱之與不辱也、乃在於惡之與不惡也、夫今子宋子不能解人之惡侮、而務說人以勿辱也、豈不過甚矣哉、（正論篇）
- (4) 漢藝文志小説家に宋子十八篇あり、班固の自注に云う「孫卿道宋子其言黃老意」と。
- (5) 料子は何人なりや確證は無いが、馬敘倫は莊子義證に於いて宋鉞と同一人なることを論證している。
- (6) 高誘の注に孟子を引用して云う、「孟子曰、陽子拔體一毛、以利天下弗爲也」と。陽生が孟子の楊子であることは自明である。
- (7) 根本的に否認するのは言うまでもなく道家。部分的否認は一部の儒家の説く所。従つて思想としての本質が同日に談じ得ないことは勿論である。